

酒蔵のあった風景

【特集記事】酒と坂戸と人々と



かつて駅前にあった「久星酒造」坂戸工場の建物

酒どころ埼玉

日本酒は、長きにわたり日本人に親しまれてきた食文化であり、祭礼や神事、冠婚葬祭と日本文化のあらゆる場面に深く関わってきた。昨今では日本酒が「SAKE」として世界に進出し、令和六年（二〇二四年）には日本の「伝統的酒造り」がユネスコの無形文化遺産に登録されたことも記憶に新しい。

日本の酒どころといえば日本三大酒どころの「灘（兵庫）」「伏見（京都）」「西条（広島）」などが有名だが、埼玉県が日本有数の酒どころであることは広く知られていない。埼玉県は、県酒造組合加盟の酒蔵が三十四か所あり、令和五年における日本酒生産量が新潟県、兵庫県、京都府に次ぐ全国四位（国税庁統計）の「関東一の酒どころ」である。では、なぜ埼玉県が酒どころとなったのだろうか。その歴史を紐解いていく。

埼玉の清酒業

埼玉県下で清酒業が盛んとなった時期は江戸時代であり、その背景には地理的条件が大きく影響していた。関東平野は荒川・利根川水系や秩父山地の伏流水など豊富な水資源が存在し、肥沃な土壌は広大な水田地帯を生み出した。埼玉県は「清らかで豊富な水」「豊かな風土に育まれた良質な米」と日本酒に必要な不可欠な原料が揃う土地柄で

あった。また、百万都市江戸に近く、巨大な消費地の需要を取り込むように県下で数多くの酒蔵が創業し、都市部に「地回り酒」が供給されるようになった。酒蔵の創業には地元の地主酒造だけではなく、現在の滋賀県を拠点とした「近江商人」や、越後（新潟県）出身者などが多く参入しており、埼玉県は酒蔵激戦地となった。なかでも、近江商人は同族経営による支店網の構築など独自の経営手腕を発揮し、横田酒造（行田市）や矢尾本店（秩父市）など現代まで続く数多くの酒造メーカーを生み出している。坂戸に酒造工場のあった「久星酒造」もその一つであった。

「埼玉産業歴史探訪」シリーズ第6回目「酒造り」を基に作成

酒造名	創業	酒造名	創業
① 秩父菊水酒造	寛永 2 (1625)年	⑩ 榎田酒造	嘉永 3 (1850)年
② 東亜酒造	寛永 2 (1625)年	⑪ 松岡酒造	嘉永 4 (1851)年
③ 藤崎總兵衛商店	享保 13 (1728)年	⑫ 清龍酒造	安政 5 (1858)年
④ 釜屋	寛延元 (1748)年	⑬ 川端酒造	安政 7 (1860)年
⑤ 矢尾本店	寛延 2 (1749)年	⑭ 南陽醸造	安政 7 (1860)年
⑥ 武甲酒造	宝暦 2 (1753)年	⑮ 滝澤酒造	安政 3 (1863)年
⑦ 内木酒造	安永 4 (1775)年	⑯ 鈴木酒造	明治 4 (1871)年
⑧ 横田酒造	文化 2 (1805)年	⑰ 丸山酒造	明治 6 (1873)年
⑨ 小山本家酒造	文化 5 (1808)年	⑱ 清水酒造	明治 7 (1874)年
⑩ 武蔵鶴酒造	文政 2 (1819)年	⑲ 横関酒造店	明治 13 (1880)年
⑪ 寒梅酒造	文政 4 (1821)年	⑳ 麻原酒造	明治 15 (1882)年
⑫ 関口酒造	文政 5 (1822)年	㉑ 大瀧酒造	明治 17 (1884)年
⑬ 石井酒造	天保 11 (1840)年	㉒ 北西酒造	明治 27 (1894)年
⑭ 佐藤酒造店	弘化元 (1844)年	㉓ 五十嵐酒造	明治 30 (1897)年
⑮ 長澤酒造	弘化元 (1844)年	㉔ キング醸造	明治 33 (1900)年
⑯ 新亀酒造	嘉永元 (1848)年	㉕ 晴雲酒造	明治 35 (1902)年
⑰ 藤橋藤三郎商店	嘉永元 (1848)年	㉖ 小江戸鏡山酒造	平成 19 (2007)年

県内の三十四酒造（埼玉県酒造組合加盟）

「久星酒造」 坂戸工場

「久星酒造」は矢尾本店創業者の矢尾喜兵衛から独立した小林善吉によって創業され、国冠酒造(灘)や鏡山酒造(川越)の礎となった。かつて坂戸町駅北側(現在の埼玉りそな銀行坂戸支店付近)にあった久星酒造の工場は、駅前の大きな区画を占めており、巨大な三角屋根の建物と高くそびえる煙突が存在感を放っていた。酒造りの季節になると、駅前通り(現在のサンロード)沿いには大きな酒樽がいくつも並び、工場には新潟から杜氏(酒造りの職人)たちが多く訪れ、長期滞在しながら酒造りに勤しんだ。

駅周辺の飲食店が蔵人や酒造関係者らによって大いに賑わっていたとの回顧録も残っており、久星酒造が坂戸町駅周辺の地場産業として地域経済に与えていた影響はとて大きかったのである。

久星酒造は、狭山市入間川の工場と坂戸工場で生産を行っていたが、坂戸工場は戦前に閉鎖となった。しかし、三角屋根と煙突は駅前のシンボリックな存在として、当時を知る人々の目には今も焼き付いていることであろう。

かつての久星酒造の面影は川越で今も見ることが出来る。川越の「きき酒処小江戸蔵里」は、久星酒造ののれん分けで創業された「鏡山酒造」の明治蔵をリメイクした施設で、埼玉の日本酒の魅

力を発信する拠点として多くの観光客で賑わっている。その蔵の屋根のたもとをよく見ると「久星」の屋号を見つけていることができるので、近くに訪れた際はぜひ見ていただきたい。

また、歴史民俗資料館では企画展「酒と坂戸と人々」との開催に合わせて、「久星酒造」と書かれた通い徳利や建物が写る写真を展示している。

これら面影を辿りながら、かつての酒蔵があった光景に思いをはせるとともに、駅周辺を賑わせた杜氏たちの作業唄、ほのかに香る日本酒の甘い匂いに想像を膨らませてみてはいかがだろうか。



「久星酒造」の文字が書かれた通い徳利

令和7年度 企画展情報

開催中

上半期企画展示「酒と坂戸と人々」と

酒にまつわる考古資料や民俗資料を展示。古来から続く人々とお酒の関係に迫る。会期は令和七年五月七日(水)から十月三十一日(金)まで

開催予告

第二十八回坂戸市埋蔵文化財出土品展

「長岡遺跡の物語〜足元に眠る二万年史〜」

坂戸市西端部に位置する長岡遺跡。台地上に刻まれた人々の一万年の痕跡を一挙に公開。夏休み学習応援企画も同時開催。

会場は坂戸市文化会館ふれあ。会期は令和七年七月三十日(水)から八月五日(火)まで。各日午前十時から午後五時まで開場。

学芸員のイチオシ!

近江地方の特徴をもつ小型甕が

坂戸市東部の高窪遺跡で出土!

遺跡から出土する土器は、それぞれ地域で育まれた文化を色濃く反映し、他地域のものが入り込めば、地域間の交流を示す重要な証拠となる。坂戸市の東端、大字紺屋の高窪遺跡(今から約一七〇〇年前頃)の竪穴建物から出土した小型の甕。口縁部の形や文様、使用された

粘土などが、埼玉県周辺で見られない特徴を有していた(下写真)。類似した特徴の土器を探していくと、坂戸から約四〇〇キロ離れた滋賀県の近江地方にあることが判明。遠路はるばるやってきた一点の土器。土器自体が来たのか、器形の情報が来たのか。いずれにせよ古墳時代の地域間交流がとて広範で活発な



受口状の口縁部
「く」の字の文様

胴部の櫛書文

ものだった証と言えよう。江戸時代に行商人として名を馳せた「近江商人」がいたように、古墳時代にも近江の人々が、地元の特産品をもって遠隔地へ交易に向いていたのかもしれない。

坂戸市立歴史民俗資料館だより 第9号

【発行】坂戸市立歴史民俗資料館
令和7年5月31日
〒350-0212
埼玉県坂戸市石井1800-6
TEL 049-284-1052
FAX 049-284-1128

【利用案内】
入館無料・月曜日～金曜日 開館
(祝日・年末年始のぞく)
午前9時～午後4時

